

妖怪少女パルスィ☆マ
ギカ

紫艶

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

また、こいしがいなくなつた。

水橋。パルスイはこいしを連れ戻すべく紫に現世へ送られる。だが、そこはとんでもない世界だつた!!

はい初投稿の紫艶でございます!

私学生なので送れるかもしれませんができるだけ投稿しようと思つてます。不定期ですが失踪しないんで安心してください(妙に漂うフラグ臭)ではどうぞ!

目次

こいしを探して	1	10話【止めてみせる】	51
1話【破滅の劇】始まり	6	11話【混沌という名のカオス】	56
2話【魔法少女と魔女】※挿絵表示	12	12話【カミングアウト】	68
3話【事件の前触れはいつも唐突に】	16	13話【私の日常、非日常】	74
4話【緑眼のジェラシー】	20		
5話【パルスイの望み】	25		
6話【なるようになる】	29		
7話【巴マミ】	34		
8話【魂って壁より硬いんだ】	39		
9話【運命は辿らない】	44		

こいしを探して

幻想郷。

人間と妖怪が隣り合って生きる、一人の賢者の理想郷。

賑やかな人里、美しい湖、瘴気漂う森、踏み込んだものを決して外に返さない竹林、そして……

底が見えないほど深い穴。その最深部に、鬼や嫌われ者の妖怪がいた。

旧地獄。その跡地に立つ大きな屋敷、人呼んで【地霊殿】。そこに、嫌われものはいた。

「……はあ」

「どうしたんですかさとり様」

「またいなくなつたのよ」

「またですかあ……」

『こいし（様）が！』

古明地こいし。地霊殿の主・古明地さとりの妹。

無意識を操る程度の能力を持つ、心が読めない悟り妖怪。無意識に無意識を操る程度の能力を使ってふらつといなくなることが多い。今ではこれが日常茶飯事だった。

「また博霊の巫女に探してもらおうかしら…」

「私もできるだけは探しますが……まあ期待はしないでください」

「ええ…」

???
Side

『……………おかしい、こいしの妖力が感じ取れないなんて……………つまさか!! 紫様アアアアアア!!』

「叫ばなくてもわかるわよ。で、なんの用? 藍」

「魔界の博霊大結界、補修は済ませましたか?」

「いいえまだ、今行こうと思っただけ…」

「おそらくそこからこいしが外の世界に行っただけと思われませう」

「はアアアアアア!!」

「紫様五月蠅いです」

「これが叫んでいられるかっての! さっさとこいしを回収しないと……」

「どうやって?」

「地底の暇そうな妖怪に声をかけるわ」

「行ってらっしゃいませ」

パルスイサイド

最近は暇だ。

私はいつも橋姫をやっている。最近はずっと地底の嫌われ者同士で仲が良く、橋に来ては喋っていた。

が。

「……来ないわね」

一昨日の辺りから来なくなってしまった。

そりやそうかも知れない。こいしがいなくなっただけのもの。

自分も何回かあった事はあったけど、確かに最近は見ないわね……

「…仕方ない、行きますか」

人（妖怪）のために動いたのは久しぶりだ。近くにいた土蜘蛛と鬼火に少しの間橋姫を任せ、地霊殿へ歩き出した。

はずだった。

「¹⁹」

足元に穴が開いた。

いや、スキマが開いた、の方が正しいか。

そして私は逃げる間もなく、その隙間に落ちて行ってしまった。

Side out

noSide

「痛っ!?!ここは…チツ、あんたの仕業か。」

「はあい、いつもプリティ紫ちゃんよ♪」

「(ウザっ……)で、なんの用」

「貴方を探しに行つてほしいのですわ…こいしちゃん♪」

「なんで私が」

「本当は身内に行かせたかつたんだけど皆仕事があるみたいだし、貴方こいしちゃん探しに行こうとしてたんでしよう?」

「はあ…これって強制?」

「ではないけど…さっさと見つけてくんないと結界が完全に閉じちゃって隙間使っても
疲れるわ、結界に干渉しなきゃいけないしい。だから…ね♪」

「……わかった行くわよ暇だったからちようどいいわ」

「あつちの世界嫉妬心激しいから、その調整も兼ねて宜しくお願いしますわ」

「……気が向いたら、ね」

「それでは、いつてらっしやくい♪」スキマオーブン

「また落とすのかよおお!!」ヒュー

「……貴方だったら……世界の破滅を止められる」

「紫様…それ一体どういうことでしょうか」

「あなたが知らなくていいわ……」

さ、行くわよ藍」

「はっ」

1話 【破滅の劇】始まり

とすん。

華麗に着地したパルスイダが何をすればいいのか路頭に迷ってしまった

「……どこに行けばいいのかしら……って痛っ!？」

小瓶と……紙？

【パルスイヘ】

はあい♪取り敢えずあなたのお家はそこにある屋敷よ。

日用品や学校のものすべて揃ってるわ。あとその瓶に

入ってるのはえーりんに作らせた『体だけ子供になる薬』よ。貴方にはこれから近く

の学校に通ってもらうわ。能力はいつもの様に使えるようにしてるし、こつち

のほうが嫉妬の力が強いからすごい妖力を手に入れると

思うけれど、こつちの人は稀にしか能力を持たないみたい

いだから、あまり人前で使わないように。じゃあこいし

ちゃん探し頑張ってる♪

紫ちゃんより♡」

待て待て待て待て。まず何個かツッコませろ。

学校って何!?! 寺子屋のようなもんかしら

まあそつちはなんとかなるでしょ…

あとあまりって何よ!! すごい奴らがそこらへんにいるってこと!?! そんな危険なことって聞いてないんだけど!! まあ、妖力が増えてる感じはするからそれでなんとか乗り切れってことなんだろうけど…

ああ…

すつごーく不安…

○月? 日

まどかSide

赤いリボン、ちよつと派手じゃないかなって思ったけど良かったら、二人共似合って

るって言うてくれたら〜！よろし、今日は二人もクラスに転校生が来るから楽しみだな。仲良くできるといいなあ〜！

プライベート丸出しのガラスの教室の中に入って、どこかの嫉妬姫と真反対の気持ちを持つ鹿目まどかは、新しくやってくる二人を心待ちにしていた。これからやってくることも何も知らずに。

パルスイSide

あゝ嫌だ、めんどくさい。

あのあと「えーりんの薬」飲んだら本当に縮んだからびつくりしたわ、耳も丸くなってるし。さすが月の賢者……だっけ？

今回は私の他にもう一人来るらしいし、こんな時期に……物好きねえ。

名前は勿論『水橋パルスイ』で登録した。らしい。金髪なんて増してやカタカナの名前。ハーフ扱いは確定ね。両親は昔事故で死んだって設定になってるけど……

結構シリアスな展開に持ってたわね、八雲紫はこういうのが好きなのかしらあん!!

(怒)

もう一人の転校生、名前は……なんとかほむらさん。名字特殊だったわね。こつちでは

こんな名前のがいっばいあるのかしら？

→自分もそれの中に入ることには気付いていない

???
Side

もう何度も見た、校舎、人、世界。

これがもう少ししたらなくなってしまうのかもしれないんだから冗談言えない。

今度こそは。

守ってみせる。

何があろうと。

何に変えても。

絶対に。

「絶対に守るから、

まどか……」

パルスイSide

…なんか先生が朝ご飯について討論してるんだけど…

嗚呼、あの先生の嫉妬心が急に強くなった…

私達のこと忘れてない？隣からすごい殺気混じりの視線がががが

「(いけない、忘れるところだった…)き、今日は転校生が二人います。入ってきて。」

なんか忘れるところだったって聞こえた気がするけどまあいいわやつとこの子の視線から外れられるのね

「……水橋。パルスイです、よろしくお願ひします」

なんか男子の視線が痛い 私なにかしたかしら…

隣の人『暁美ほむら』というらしい。こいしを見つけるまではお世話になる相手だ。覚えておかないと。

そして私の席はピンク髪の前になった。

「わ、私鹿目まどか！よろしくね、水橋さん！」

パルスイ「パルスイでいいわ、よろしくまどかさん」

まどか「じゃあ私も呼び捨てでいいから！よろしくね」

嗚呼まだ…えつと…ほむらの視線が酷い……

私なにか酷いことでもしたかしら…丑の刻参りだったら何度かやったけど

うーん前途多難ね…

2話【魔法少女と魔女】 ※挿絵表示

前回のあらすじ

『殺気ががががが』

「守ってみせる」

「奈落の底で幕が上がった絶望的な喜劇♪」

こいしはいまだにみつからない。でも、こっちの生活も悪いもんで無かった。

「この場を借りてお話を致しましょうか♪」

寺子屋に通う前はずっと屋敷に閉じこもっていたが、それでも外の景色は見えていた。それなりにきれいで、一つの世界を感じたようだった。

「第一幕【閑静な日常】キャストはありふれたモブで〜♪」

今こうして歌いながら見ている景色も、これまた世界のひとつなのだろう。

とまあ綺麗事のようなものを考えながら目の前の状況に心の奥で困惑してるわけで。

「私ちよつと体調が悪くて。まどかさん、保険委員だったわよね？保険室まで連れて行ってくれないかしら？」

「不器用な日陰も……♪」

急に皆が静かになっちゃったからこつち見てるじゃない……眼差しがキラキラしてるわ、ちよつと怖い……

嫉妬も混ざってるじゃない。これのどこに嫉妬するのかしら……まあ、ご馳走様でしたそれに、「ほむらさん」。

結構目立ってる。そりやそうか、名指しだしね。それにまだこつちを警戒している。私こつちでも嫌われ者なのかしら……それになにか怪しい感じがする

こつちは……

後を追けるか。ああめんどくせえ

ほむらSide

今度は金髪緑目美少女か。正直言って赤面しそうなくらい可愛い。赤くならないように顔と気を引き締めて彼女を見る。私は今かなりしかめっ面だろう。集中し過ぎておかしい感じになっちゃいそう。でも普通の人間だし、いいか。今までも何回かこういうのはいた。中には『ほむほむは俺の嫁』とか言って襲いかかってきた男もいたが特に魔法少女に関わることなく失敗を繰り返してきた。この娘もまたその一環なんだろう。時間を巻き戻したらまた消えていなくなってしまうような、異常。きつとそれだけで終わるんだ。

『き、今日は転校生がいます。入ってきて。』

その合図で私達は教室に入る。

『…水橋。パルスイです。お願いします』

ふーん、パルスイって言うんだ。覚えとこう。

そして自分の名前を言う。私達二人の席はまどかの近くだった。まあ知ってたけど。

…さて、そろそろかな。まどかを廊下に連れ出して最初の忠告…!

『私ちよつと体調が悪くて。まどかさん、保険委員だったわよね？保険室まで連れて行ってくれないかしら？』

「不器用な日陰も……♪」

え、何さっきのきれいな歌声。パルスイさんかな？今回のイレギュラーはイレギュラーすぎるわよ、もう。当人は赤くなってるし。可愛い。

そしてまた静かになってこつちを見る。これはいつも通り。そしてまどかは保険室まで連れて行つてくれる。いい子。

保健室に行くところいつもの忠告をしよう。無駄とは分かっているけど。

さっきの水橋さんがこつち見てるのわかる。無駄と分かっているても邪魔はあまりされたくない。

そして私は、見慣れた廊下に出た。

3話 【事件の前触れはいつも唐突に】

パルスイSide

廊下。この校内は教室がガラス張りなので、登校初日から怪しいことはできない。しかもガラスの内側から男子がガン見している。悪寒を覚えながら二人をつけていると、突然「ほむらさん」が止まってまどかに何かを話しているのを見た。一方的に見えなくも無いその会話を見たあと、保健室に辿り着いたのを見て小走りで教室に戻り、授業を受けた。

正直言つて何言つてるのかさっぱり分かんない。わかるのは歴史や古典くらい。テストとか来たたらいろんな意味で私は終わりだろう。そうなる前に紫に何とかしてもらおう。

休み時間に紫が〈頭の良くなる薬〉を持ってきてくれた。

学校が終わって放課後、まどかと「さやか」って娘と緑の人に「お出かけ」に誘われた。勿論私は断る。冗談じゃない、そんなリア充はびこる『しよっぴんぐもーる』なん

て言ったらキャラ崩壊の斜め下に行く残念な結果になってこの娘たちに迷惑がかかったわ。異変起きるわ。とにかく、この娘たちに迷惑をかけるつもりはない。

そう

『この娘たちには』、ね…

「……………来ちゃったわ…」

喫してもいいかもしれない。紫にお財布もらったときに見た中身。ホント無限。奥に境界があつて、覗いたらお金製造すること繋がつた。その便利すぎる能力が妬ましいわ…

とにかく、まずはお洋服でも見ようかしら

「ああ、こつこつて結構いいかもしれないわ…」

いろんなものが目に映る

宝石やペンダント

美味しそうなパン

風船を持つて嬉しそうな子供

結婚指輪を選ぶリア充

リア充リア充リア充リア充リア充リア充リア充…

「……ちよつと難があるけどね」

そう呟きながら私は料金を払つてカフェを出た

4話 【緑眼のジェラシー】

錯覚。

人間が混乱した時に起こったりする現象だ。

その内容は人によって違う。

例えば自分が刺されるイメージを持ったり、

内側から害されて金縛りになったりと、結構マイナス面の錯覚が多いが。その理屈は妖怪にも通じるのだろうか？

答えはイエス。

地底の妖怪（主に鬼）は殺気を放つたびに背中に何かがあるような感覚を覚える（虎とか龍とか）。まあ、それと同じような物と考えよう。

現に今。

禍々しい世界（という名の錯覚と考えている）に捕らわれた一人の少女、中身数百、数千歳の橋姫は考えていた。

ここどこ、と。

数分前

「多少難があるけどね……」

そうつぶやいて私は店を出た。

はずだった。

「!？」

世界が変わった。なんか禍々しいやつに。

いや、決して私が嫉妬心を操ってあたり一面を血祭りフィーバーにした訳じゃないわよ、本当に。まあやつちやいそうだけど……でもこれは違う。突如として世界が変わっていった。

「……ど……結局かしら？」

錯覚か、と考えたがその考えはすぐに崩れてしまった。

『6*596||&.???×※?!!』

『.?.?<|.].?/?<.||%||~||.?)』

あらか言ってるのかしらこの個体。

??

妖精とやらに比べたらまだ妖精のほうが可愛いわ。氷の妖精や緑色の妖精はちゃんと言葉を喋っていたけど、この前アリス…だっけ…って人に連れられてきた紅魔館にいるあの妖精達は何言ってるかわかんなかったわ。もしかしてこいつらも同じような物なのかしら…?

まあ、どうでもいいか。

「こころにはだーれもないんだしね……」

その緑色の瞳を妖しく輝かせるとポケットから一枚の紙のようなものを取り出した

『スペルカード発動……【花咲爺 シロの灰】』

こつちに来てから初めてはなったその弾幕は、妖力が増して美しさも折り紙つきなルナティックを超えたファンタズムの難易度になっていた。もちろん非殺傷設定にはしていないので周りで死亡者(?)が続出していく。

言葉意味不明なそいつらは最初は避けれていたものの、どんどん再起不能になっていきパルスィの周りに生存者はいなかった

「非殺傷設定は……ここ幻想郷じゃないからやんなくてもいいわよね」

とにかくここにはまだかや「ほむらさん」もいることだし、適当に歩いてればなんとかなるでしょ。早く合流しないと。ここ、紅魔館並に目に優しいんだから。

「でも……って……どうやって歩くのかしら」

私は方向音痴では無いと思うが、流石に初めてきたところをウロウロしてたら迷うに決まってる。

そう思つてまた立ち止まっていたら、

「……結界がなくなつた……？」

まあいい、これで少しは探しやすいなつた

「早く合流しよ……」

しばらく歩いていると、消化器を持ったさやかがいた。何してるんだろうと思って声を掛けようと思ったがなかなかシリアスな展開になってるらしいのでさやかとまた別のところで見守ることにした。

5話 【パルスイの望み】

私は今、しよつぴんぐもーるの中で突如起きた事件に関わっている。結界に取り込まれ、そして消えてった結界の正体という謎をすみに置きながら、今日の前で起こっている状況に冷静に対処している。つもり。

ほむらさんが、まさかイタいコスプレ少女だったとは。銃を持って白い猫？いぬ？に何かしてたのを、まどかがかばっている状況。耳を澄ますと、白い何かが喋っているのがわかる。あれしやべるんだ。不思議だなーと思いつながら聞いていると、またこの近くに「巴マミ」というもう一人のイタい人がいることがわかった。とにかく私は無縁、これ以上現場が荒くなつて取り返しがつかななる前に帰ろうと背を向け、しよつぴんぐもーるをあとにした。

しよつぴんぐもーるから出て数分、私はきつきの猫（？）と対面していた。

「……なんの用？イタいコスプレ少女達はあつちよ？」

『いいや、僕は君に用事があるんだ、水橋パルスイ。』

「…喧嘩売ってんのかしら？売られた喧嘩は買うわよ？」

『これは質問さ、そんな邪険にしないでくれ。』

「じゃあさつきと言いなさい。」

『水橋パルスイ、君は一体何者なんだ？』

「は？ただのよ：人間だけなんでそんな分かりきったこと」

『君からは絶大な魔力を感じる。それこそ「鹿目まどか」と同じくらいの』

「ふーん…だから何。わたしに何をやれって言うの？」

『話が早くて助かるよ。…』

僕と契約して魔法少女になってよ！』

「え、何それもしかしてさつきのイタいコスプレ少女達は魔法少女になっていたってこと？」

『そうだね。さつきのとは「曉美ほむら」と「巴マミ」のことかい？』

「あんたさつきあそこにいたやつじゃないの？」

『僕らはいっぱいいる。そしてみんなから「キュウベえ」と呼ばれている』

「ふーん…なにか見返りはあるの？」

『君たちの願いを一つだけ叶えてあげる。なんでもいいんだよ。』

「じゃあ最後の質問。」

具体的に《魔法少女になる》ってどういうことなの？」

『それは…「言えないこと?」……』

「言えないことだったら私は魔法少女にならない」

『…魔法になることと同じさ。僕たちは君たちの魂を形にして君たちの感情が希望から絶望へと変わるこれをエネルギーとしている。君とまどかが魔法少女になれば僕のノルマはあつという間に達成するね。』

「魔女って何よ。」

『さっきの結界を作っている、魔法少女の成れの果てさ』

「さっきのは魔法の仕業だったのね……あの目に悪い配色。たまんないわ」

『さっきから君凄く冷静だね。マミも見習ってほしいよ。話の続きだけど…まあ、それらから一般市民を守るのが魔法少女の仕事さ。だから僕と契約して魔法少女に……』

「そういつた修羅場が多いだけよ。そうね…」

どうしましょう。確かにこいしを探しやすくなるかもしれない。無意識に魔法少女をやつてたらなおさら。でも問題はデメリット。欠かさず魔法を倒さないと私は魔法女になつてしまう。一番の失態ね。そしてそれはこいしにもありうる

昔幻想郷屈指の人たちが狂化するという異変があつたらしい。その中には私も含まれていたという。全然覚えてないが。

「…いいかしら。」

『なんだい?』

「その魔女化は、いわゆる狂気のようなものなの?」

『そうだよ。その狂気から救えるのは魔法少女だけなんだ』

それなら話が早い。こいしが魔法少女になって魔女になっていたとしても博霊の巫女のような力があればもとに戻せる。

「……だったら願うわ。」

「私に霊力を。巫女のように神聖な力を。それがあれば私は魔法少女になってもいいわ。」

『わかったよ水橋。パルスイ。さあキミのソウルジェムだ。』

「…本当に、これでいいのね?」

そうつぶやいて、パルスイはできたばかりの自分の魂を見ていた。

6話 【なるようになる】

あれから少し立って。

私は性格からかソウルジエムが濁ることが多い。

だからこうやって魔女刈りを頻繁に行わないといけない。魔法少女のことを紫に行ったら「心配ないわ」と言われて安心した。これでこいしを探せる。

「……3体目」

学校から帰ってきて掃除する魔女は3体目。一応霊力使って浄化するが、器が消滅しているので生き返ることはない。きつと今頃赤いツインテールの死神のどこにいるだろう。そしてそれから出てきた『グリーンシード』を使って浄化する。心が少し晴れた気分になる。え？魔法少女の衣装？使ってないわよ、魔法少女の力なんて。

『全く……君は魔法少女なんだから魔法でも使ったらどうなんだよ』

「使ってるわよ？魂の浄化に。」

そう、ただでさえ日中にぶりきつてんのに魔法なんか多発できるかっての。そんなことしたら魔女になって私がツインテールと合う羽目になるわ。

まだ、私は私が魔法少女だということはバレていない。ほむらには魔力の量の問題で

警戒されてるかもしれないけど。

「……そろそろ帰らないと。どこかで誰かが見てたら不審者扱いされるわ」
『どういう意味だい？』

「近くに魔法少女と魔女の反応があるわ。早く帰りましょう」

『グリーンフシードはいいのかい？』

「危険を晒してまで行くつもりはないわ……そうね、裏路地を通りましょう？」
『わかったよ』

そして私達は家に入る

「おかえりなさいパルスィ。」

「……紫、人んちにいるんだったら連絡してよ。」

「まーそうかつかなさんな。はい、グリーンフシード。」

「これ……まさか、あんた！」

「ええ、ちよつとなつてみたわく、魔法少女♪」

『……八雲紫か。君は一体何者なんだい？パルスィよりもすごい力を持っている』
「たーだの18歳よ。……どう、手がかり見つかった？」

「いいえ、なんにも。で、八雲。あんたは何を願ったのよ。」

「そうね、『私の考える理想郷』の『私の考える平和』

これを『永遠に』保つてといたわ。」

「あんたらしいわね…それであんたのグリーンフィードは大丈夫なの？」

「そんなのさつさと辞めちゃったわ。この願いで博霊大結界が完全なものとなって、幻想郷は完全に今、この時代と隔離されたもの。これ以上、魔法少女やつてる必要はないわ。このソウルジェムの中身は今が殻よ♪」

何なら割つて確かめてみる？と笑いながら紫色のソウルジェムの殻を差し出す八雲紫にキュウベえは戦慄していた。

『八雲紫……君は本当に……』

「あらあら〜♪いたのね、白い悪魔さん♪これ内緒の話だからあく、口封じさせてもらうわね?」

『何をするんだ!?!』

「こうしてえ……」

途端に僕の上半身がなにかに覆われ、中でうごめく目を見た。

「こうするの♪」

そして僕の意識はなくなった

グチャ。グチャ。ベシヤ。バキツ。

と、嫌な音が部屋に響く。

「相変わらずいい趣味してるわね、八雲」

「あらそう?……じゃ死体の処理よろしく、藍。」

『はい。』

死体。

そう、そこには

さつきまで生き生きとしていた『キユウベえ』の残骸があった。隙間によって切り裂かれ。顔があるはずのところにははみ出た脳みそが。白い体は、赤黒く染まっていた。それはそれは、綺麗に。

「じゃあ魔法少女の解約お願い」

「はいく♪」

まだ少し血の匂いのするそこで、一人の魔法少女は誰にも知られることなく魔法少女を終えた。

「また何かあったらその時はあたりにいるキュウベえを頼りなさい。あのキュウベえは死ぬ間に『感情の病』にかかって通信を切られたから、この情報は誰にも知られないわ」

「ええ、そうするわ」

7話 【巴マミ】

今私は走っている。

魔法の手下から逃げるために。

何言ってるんだコイツと思つたやつもいるだろう、作者の語彙力だ、勘弁してくれ。つていうか誰に話してんだ。まあ、理由は簡単。

この結界の中に誰かがいる。

魔女ーとか、手下ーとか、そんなんじやなくて。魔力を持った人間。この前排除したキウウベえが言つてた私以外（元・魔法少女だけどね）の魔法少女かなーつて思つて行きたくなつたけどそこは自重。今行つたらいろいろなこと答えなければならぬぞめんどくさい。それにしばらくキウウベえを見たくない。あとここでスペカを使うところを見られてしまったらその説明もしないといけなくなる。全くこんな時に限つてなぜ出

しやばる魔法少女。

だから走る。結界の出口を探すために。一向に見つからずそろそろ体力にも限界がきはじめているけど。でもこんなにきれいなバラのさく結界。ちよつと疑問に思ってきた。

「これつてもしかしてこいしの…?」

こいしの弾幕。中にはバラを模した弾幕もあり、これらのバラはそれを彷彿とさせる。いよいよ怪しくなってきた。

「………予定変更」

魔法の姿を見に行こう。それでこいしじゃなかったら則退散。そうと決まれば急がなきや

なんじゃありや

ちようちよのような、魚のような…もしかして前見たあいつか?! しょっぴんぐもーるの。でもそれよりも驚くのはこっちだ。

黄色いグルングルンのお姉さんが超巨大重火器をぶん回して魚を駆逐しているの
か見て取れない光景に出会った。激しく動くたびに揺れる山に対する妬みははしにお
いといて。

駆逐し終わった黄色いグルングルンは優雅に着地するとこっちを見た。やばい、バレ
た

退散しようと思つて背を向けたけど大声でまどかに呼ばれてしまった。うう、畜生め。

『貴方は……もしかして最近来た転校生?』

「……はい、水橋パルスイです」

『そう!私は巴マミ。貴方達の先輩よ。それでどうしてここに?』

「……………この街を見とこうと思つて、歩いていたらこの空間にいました」

『そう。このふたりとは知り合い?』

まどか「パルスイちゃん!マミさんすごいんだよ!魔法少女なんだって!」

さやかもいたけどしやべる前にマミさんが聞いてくる

『パルスイちゃんもなつてみない?貴方はすごい素質を持っているらしいわ!』

……まだ、今はならない。ためにためてから、また魔法少女になる。

「考えておきます」

『そう!じゃあ続きね!パルスイちゃんも聞いてつて!魔法少女になったときに一番大切だから!』

ソウルジェムを取り出してグリーンフシードの説明をしたけど知つてたので半分聞き流してまどかさんを見ていたけど、かなり顔が輝いていた。なるきね、魔法少女。まど

かさんも魔女になるんでしょう。それでシステムが回ってる。……っていつぞやの
キュウベえが言ってた。

一本沿いの帰り道。

「マミさん楽しそうだったなー」

水橋。ハルスイはその笑顔に嫉妬した。

8話 【魂って壁より硬いんだ】

後日。

二人は魔法少女になる気満々らしい。まどかやさやかはうきうきしてたし、授業中の念話もそのことばかり。教室の中でキュウベえは動き回るし、ほむらさんはキュウベえを見ながらすごい顔してる。キュウベえ正直言うとうざすぎる。何回スペカを取り出そうと思ったか。我慢した私を称賛してくれ。

昼。屋上でまどか達とご飯を食べる。こう見えても料理は得意なのよ。たまりに酒の肴として私の作ったスイーツ持つてく金髪爆乳の豪腕で妬ましい輩とか、朝ご飯たかりに来る癖して素晴らしい笑顔で妬ましい土蜘蛛とか、勝手に台所借りて美味しいの作ってくれる妬ましい鬼火落としもいたけどここはそういうのがいないから助かるわ。まあ、言わないけど。

話をもとに戻そう、また魔法少女の戦いに駆り出されるのだ。これに関してはなんの変哲のないただの魔法少女の義務。それでも私にとっては地獄かもしれない。

だって倒せるのに倒せないんだよ？ストレス貯まりまくってマミさんにばるばるしちゃうよ？目の前で爽快なの見せつけられたら暴走する自信あるわ。まだこの妖力抑えきれないの。今日だってあの先生のハンバーグに対する議論が始まって『ケチャップかデミグラスソースか』みたいなどこでもいい質問を男子（名前おぼえる気無い）にしてたし。妬ましさが伝わってくるわ、ご馳走様でした。

そして目の前にいるさやかか片思い相手、上条。今は入院してるらしく、今日はお見舞いに行くっぽい。ってか強制的に私も行かなきゃいけない流れに…ああなってるなこりや。病院は行ったことないのよね、永遠亭つてのがあるらしいけど。なんでわざわざ迷いの竹林なんて面倒くさいところにいんのよ。地底人最悪じゃない。まあヤマメが暴れなきゃどうとでもなるからいらんのかも知らないけど。

でも病院か。興味はあるわね。どんなところなのかしら。ついてく価値はあるかも知れないわ。

私はこの選択を後悔した

病院はかなり息の詰まるような場所だった。

なんかね。暑くもなく、寒くもなく、微妙な線走ってるから空気がぬるい。吸いたくなくなる温度？で、みんな無言（これは当たり前）がかなり雰囲気悪くしてる。あと……
（なんで私が肺炎なの……）

（骨折は向こうが悪いのに……）

（なんで私だけ？外で遊びたい）

（お母さんが……もうだめなのかな……う……もう……どうなつてもいいや……苦しい）
心の声ブラックさんがいっぱいいる。これがまた雰囲気悪くしている。

目の前にいる上条もそう。心は読めないけどだいたい何を思っただんなでるかがわかる。

「新しく来たパルスイちゃんだよー！」

「よろしくね上条くん。」

「おーよろしく」

きれいに笑えたかな？私って丑の刻参りのときは素晴らしくきれいに笑えるんだけどね…

病室を後にしてしばらく雑談をしながら廊下を歩く。このまま平和だったらなくとか考えてたら、二人共険しい顔してきた。なんのこっちやと思っただけ見たらあら不思議。壁にグリーンフィードが刺さってるではありませんか。っていうか刺さるんだあれ。もう少し柔らかめの…ね、優しいアレだと思っただ。仮にも元魔法少女の魂だもん。あ、魂だからかな？

あれ、まだかたないし。え、待って、わかんないよ？病院初めてだからわかんないよ？なんで一人にするの？

「…………おーい…………」

周りに誰もいないし、グリーンフシードは孵化寸前。

あ、これオワタ＼（[^]p[^]）／

ってかなんで刺さってるのかなー…誰か刺したのかなー？んー…ん？そいえばブラックさん達の中に自分自身投げてる苦しみ持ったやつがいたなー……

ま
さ
か
ね
w
w
w



「グリーンフシード…かしら？つてちよつとまどかあ!?!さやかあ!?!私ここ初めてなんだけ
どおおおお!?!」

おいてくれました

「ぱるぱるぱる…もう孵化前じゃないのお…ってかこれさっきのブラックさんのものか
つゝ…」

「58#^%@(##%*”)(^#&mp;)(\$0?も?!」

「@69#%8@&mp;)583???)←?!!」

「うっわあ…孵化しちゃった…ってか何あの球体…なんて言ってるのよ…」

気づけば私は囲まれていた。超大量の球体に。

『?!√※×☒☒”}∕☒☒・∕?}』

「#6#9???)^?≡<?%∞∫μπσπ!!」

「7”^)(59=!!!」

その掛け声(?)と同時に、カサカサと音を立てながら大量の球体がこっちに追いかけてきた。

「きゃああああアアあつ!!キイイもおおいしい!!」

そして、今に至る。

「ああああああああああああああああああああもうめんどくさい!!! スペルカード発動っ!!」
【恨符】『丑の刻参り』っ!!!」

殺傷設定の弾幕は、危険だがそれでも美しく。弾幕ごっこはあくまで美しさを競うものであり、パルスィのそれも綺羅びやかに舞っていた。

「…まけたかしら…」

球体共が追いかけてこなくなってから改まって周りを見るが、やっぱり好き好めるよ
うな場所ではない。

「早く出ないと。出口どこかしら…ってえ？何かしらこの赤いリボン」

リボンをたどると、先日の転校生「ほむらさん」が、拘束されていた。

「…えつとこれどういう状況？」

「あなたは確か転校生の…：…どうしてここにいるのかしら？あとこれ、解ける？」

「気付いたらここにいたの。どこだかわかなくて迷ってたんだけど…：はいっ、立てる
？」

「立てるわ。ありがとう。」

「……出口どこ？」

「おそらく魔女を倒すまでは見つからないと思うから……私と一緒に来なさい」

「……わかった」

魔女のプライベートルーム。ほむらさんはそう言った。ここに、球体たちを生み出す魔女がいる。

「行くわよ」

「ええ」

そして開けたのはちょうど、バマミさんが例の超巨大重火器を魔女に放ったところ。小さな小さなその魔女は、いとも簡単に頭を撃ち抜かれて……本性を表した。

「ツ!!!」

ヤバイ。巴さんが、死ぬ。どうでもいいけど、駄目な気がするから。気づけば私は、行動していた。

「紫、隙間」

「大変ね〜♪」

気絶した魔法少女の巴さんを抱えて、やっぱり見ていたかと呆れながら隙間に飛び込む。

今までで一番早く動いた気がする。誰かに見られてなけりやいいけど…

まあ、あとはなんとかしてくれるでしょう、ほむらさんが。

「早く帰ってゆつくりしよ…」

幻想郷Side

「…ふふっ」

「どうかなさいましたか、お嬢様」

「運命が、変わった」

「と言いますと?」

「これから、また楽しくなるわよ。運命通りの運命は辿らない。理に導かれるべき一人

の運命が、たった今変わっただけ。でも、これからもつと豹変するわ。外はいろいろ変わったのね。気にならない、咲夜？」

「……いいえ、私はお嬢様に使える身ですので……常にお嬢様の運命の下にございます」「あらそう。これからが良いところよ。この世界をひとつなぎにする大きな運命が変わるわ。しかと見届けなさい。」

「はい」

「ふふっ……こんなに月が紅いのに……」

『楽しい夜になりそうね』

10話【止めてみせる】

結論から言いましょ。

私は、生きていた。

すっかり油断してたから、私の人生はここで終わりと思っていた。友達もろくにいず、一人暮らしで寂しく過ごしてきた人生。そんな人生に手を差し伸べてくれたのが、キユウベえときやかちゃん、そしてまどかちゃんだった。私は調子に乗っていたのかもしれない。新しい、人生の仲間。魔法少女の後輩。良いところを見せようと思っていたけれど、結局からまわり。視界が一気に真つ暗になって、そこから記憶は全くなかった。

それなのに。

「いきで………る？」

「起きました？ 巴さん」

「あなたは……まどかちゃんの」

「水橋です。久しぶりですね、巴さん。」

「どうして私はここに？ 私は死んだんじゃない……」

「ええ、死ぬとこでしたよ。私が居なかつたら」

「どういふこと……？」

「それはw『私が説明するわ』被せんなババア…」

突然、何も無いところから隙間が現れ、胡散臭そうな人が出てきた。

「!?どこから…あなたまさか魔法しょ」

「それは違うわ。私達は貴方と違う人種なの」

「あなた達って…まさかつ!!」

そう言つて巴さんはこつちを見てきた。

はあ…ま、いいか別言つちやつても

「……改めて自己紹介するわ。地底の妬み妖怪、【橋姫】の水橋パルスィよ。」

「…騙して、いたの?」

「いいえ。都合が悪かったから教えていないだけ。それに私は【人間です】なんて言つてない」

「……そう、パルスィちゃんは妖怪なのね」

「同じく、幻想郷管理者の隙間妖怪、【賢者】の八雲紫よ。長い間よろしく」

「ええ。……長い間?」

「貴方は一応死んだことになった身。幻想の存在として、その時が来るまで幻想郷で管理するわ」

「死んだ身……？」

「貴方はあの魔女、シャルロットに全身を喰われ死んだことになってるわ。」

「じゃあなんで……!!」

「私が割って入った。久しぶりに全力で動いたわ。あー明日は駄目ね。ちよつと休みた
いから、そろそろそこ、避けてくれる？」

私はソファに寝かされていたようだった。ささつとそこから避けると、『ありがと』と
言つてパルスイちゃんソファに深く腰掛けた。

「パルスイ。ゆーぎが「飲まないか」つて言つてたわよ。一緒に幻想郷行く？一旦」

「さつきから言つてる、その幻想郷つて何よ？」

「妖怪と人間が等しく暮らす幻想の存在。私の理想郷。忘れられし者たちが辿り着く最
後の砦よ。」

「私の家使つていいから。しばらくは幻想郷に居てもらおうわ。あとゆーぎには今は飲め
ないから、私の家にいるはずの金髪の娘よろしくつて言つていて」

「はいはい。じゃ行くわよ」

「……パルスイちゃん。」

「なんですか？」

「頼んだわよ。皆を。」

「……………わかり、ました。」

「良かった。心置きなく行けるわ。」

「じゃ、またね。ハルスィ。」

「……………」

ふふっ、面白い。

逆らえないのなら。

それが運命なのなら。

変わることはないことなら。

それが関わるべきものじゃないとしても。

それが命の危険を脅かすものでも。

きつと私を楽しませてくれるから。

本気で遊ぶわよ。

この世界が破滅へと歩んでいるのなら。

「上等じゃない。」

絶対に。

「止めてみせる」

11話【混沌という名のカオス】

た。バママが幻想郷に行ってから二日ほどたったある日。この学校に、転校生がやって来

『秦こころ、です。どうぞ、よろしく』

《休み時間》

「……どうして幻想郷の者がここに居るの？」

『紫つて人が、私を落として、気づいたらここにいた』

この手紙と、この薬と一緒にと言つて差し出してきた手紙や薬は自分が貰ったのとは
ほ同じものだったので内心呆れる。

「……私は水橋パルスィ。地底の妖怪。貴方は確か、秦ころだったわね？」

『うん。私はこころ。面霊気。何時もは……いろんなところにいる』

面霊気とはパルスィには初めて聞く言葉だったけど人間でないことには変わりはないんだなと感じそこは隅に置いた。

「この世界が今どういう状況なのかあなたは理解している？」

『正直いって、なぜここに来たかも分からない。ただ、紫がここに私を落として薬と手紙を置いていって、その後制服を着た私を見て先生がなんか言ってる』

その後の経緯を全て聞くとなるほどがっつてんが行く。

「じゃあ何、もしかして住むところとかも……」

『ここにもう一人、知ってる人がいるって言われた』

「あいつう……」

そうぼそつと呟き、肩を思いつきり落とす。そういうことか、そういうことか、つまりだ、

「私ん家使えってか……」

流石紫、手口きたねえ……

『さつきから、なにをブツブツと？』

「ん、ああ気にしないで。家とかはどうせ私ん家使うことになると思うから今日は一緒

に帰りましょう」

あと現状説明ね、そういう所で休みの時間が終わりそうになる。

「はあ……前途、多難……」

《パルスイの家》

『ここか、これから使う家』

ほー、と感心の声を漏らしたところ、でも顔は変わらない。葉でお面も見えなくなっ
てしまっているのです、どういう感情をしているのかは分からない。

「早く入って。……お茶でも入れてあげ……!?!」

今からなにか臭う。鼻にくるアルコールの匂い、耳も澄ませばなにか聞こえる。

「まさか……!?!こころ!ちよつと一緒についてきて!」

『なーにー』

そして今の扉を勢いよく開く。そこには

「ん、パルスイじゃん、おかえりー」

勇儀と、

「パ、パルスイちゃん、私は止めたからね!? 人のうちのお酒はダメって……」

「巴ママ」。

「……はあああああ」

深いため息をつく奥の部屋へ行き、作りだめしておいた藁人形とトンカチを取りだした。

「ちよつおまつマジでそれは冗談ならねえからやめろお前えええええ」

「パルスイちゃんやめてえええええええええ!!!」

『くぎわすれてるよー』

「大つつつ嫌いだアアアアアアア!!!」

「!!!!!!」

「……で、なんの用」

クールダウンしたパルスイは冷静に聞く。

「ん、特にないかな、これといったことは」

また鬼の形相で立ち上がろうとするパルスイを3人（マミ、勇儀、こころ）で必死に抑える。

「最近おもいつめてるようだったからさ、パルスイ。だからさ、一緒に吞もうぜー」

自分を氣遣つてくれている。それだけで酒を飲んでいなくとも赤面してしまう。私は勇儀のそういう所が好きで、一緒にいるんだって頭のなかにいっぱい思いが広がる。

「……今日だけだからね」

そう行つてコップを取りに立ち上がる。どうせ勇儀のことだから色々冷蔵庫に突っ込んでるだろう。そう思い開けると予想どおり、元々あった○健美茶が隠れるくらい酒が入ってた。つかこの酒全部幻想郷の私んちの酒じゃん、ふざけんな（＃・ω・）

そう色々考えるけどすべてをまあいいか、で片付ける。

「あ、そうだ。」

そう言つてどこかから取つてきたシャーペンと紙になにかを書いてから、またみんなのいる居間にグラスと酒を持っていった。

「あ、あの私未成年なんだけど!？」

「ん？ああはい爽○美茶」

「幻想郷に歳は関係ないだろ飲め飲めー!」

『勇儀、ここ、幻想郷じゃない』

「あ、そうだった」

「『(自分でやってるの、馬鹿なの……?)』」

結局ママが無理にお酒を飲んでダウンし始めた頃に境界が開き紫がやってきた。

「……なにをやってるのかしら（；；ω；）」

「……勇儀だからね」

「ちよつおまつ言うなよっ！」

「それについては言及しませんわ……」

そう言つてママを近くのソファに寝かせ、ママの座っていたイスに座り話し始める。

「……こころ、いきなり落としてすいませんでしたわ」

『気にして、ないよー。さつき思いつ切り踊れたからね』

「勇儀だからね」

「……テヘツ（？▽？）ゞ」

「……ハア。それで、こいしちゃん探しは今のところ？」

「ええ、さつぱり分からないわ。ただ、これについては感覚なんだけれど」

「……インキュベーターが減っている気がする？」

「ええ、まだかにまとわりついてるインキュベーター、授業中凄いうざかったのに最近全く見なくなったの」

『インキュベーターがいた頃は知らないけど、何も見なかった』

「それに、街中歩いててもそうそう出くわさなくなったっていうか……」

「ふーん……」

紫は考える仕草をする。

（私はなにも手を出してないしなー。ってことはこっちがわのだれかがやったことになるとおもうんだけど。ただ、魔法少女の本当の意味を知るものって少ないから特定しやすいはずなのにそれでも最近は動きを見せるような怪しい魔法少女はいなかった。つて言うことは）

「それ、こいしかもしれないわねえ」

そんな爆弾発言にみんなして驚愕する

「え、どうして？」

「え、だって怪しい魔法少女が居ないんだったら第三者の可能性を考えない？なにを理

由で集めてるのは知らないけど実際居ないのは事実だし。」

「そうか……そうね、考えてみる」

「何が何だかよくわかんないけどさー」

このおもそうな空気に耐えかねて勇儀がついに口を開いた。

「要するに終わりよければ全てよしでしょ、今なにをどう考えたって何も変わらないんだから。今日くらい楽しくいこうよ、ほら紫も飲め飲めー！」

「え、ちよつ、私は」

「こっとなつたら勇儀は止められないわよ」

『また踊れるのー?』

カオス。

「私はもう帰るわね」

マミと勇儀を境界に落として紫は帰って行った。

「あいあい、わかったから……こころ、ちよつとべつとまでおねらい……」

『わかったー』

後日談、パルスイは朝覚めて居間の汚さに驚いたがキッチンに書いた書き置きを見て「私のバカ……」と後悔したようだ。

〔書き置き〕

これから宴会。勇儀がやった。

居間掃除は覚悟しておけ。

12話【カミングアウト】

こころが来てから少し経って。

学校の授業が終わってから、私達幻想郷組は暁美ほむらに連行されていた。ここは廃ビル。こんなところに近寄るやつはそういない、そう踏んでの判断だしたら結構大切な話があるのだろう。

「…なんのようですか、ほむらさん」

「貴方達に聞きたいことがある、【水橋パルス】……ぱるっ、ぱるしっ、………水橋さん、秦さん」

盛大に嘯まれた。そりゃあ読みづらい名前かもしれないよ、でもそんなことつてあるのかしらん。

「貴方達は、一体何者なの？」

「それは、どういうことだ」

こころが答える。そのまんまの意味だと思っただけかこの子は面霊気、お面が無いと感情をうまく表せない子。はつきり言っただけそのポーカーフェイスでその反応はホラーよ、ホラー。

「…そのまんまの意味よ。貴方達、特に水橋さんは分かるんじゃないの?」
「…魔法少女のことかしら?」

「ええそう。そして私も」

そして言葉を切つて変身する。

「魔法少女。」

「ええ、そうね。…つまり、何を言いたいのか?」

「魔法少女についてどこまで知ってる? 貴方の本性を教えて」

「…どういふことかしら」

「一番最初に疑問が浮かんだのはお菓子の魔女の時。貴方は私の目の前に居たはずだったのに、消えた。その時私は見たわ、貴方が巴马ミを抱えたところを」

「…なんの話」

『とぼけないで』

そう言つて銃を構える。別一発打たれたところで死にはしないけれど痛いものは痛いのでとぼけるのはやめにしよう、やゝめた。

「…こころが身構えているのが見える。まあ、お面割られたら大変なことになるしね。」

「…こころはあ、言うしかないのかしらね。こころ」

「うーんと、パルスィに教えてもらったのは魔法少女が魔女になること」

「そう、それで私達はただの人間。これでオーケー？」

「まだよ。貴方嘘をついている。」

「こいつは鬼か？」

「……ゆかりー。」

『私から話しますわあ。』

どこからともなく聴こえるいつもの声にほむらさんは戸惑っている模様、こころ？しらん。驚いてるんじゃない？

そしていつものように空間を引き裂いて顔を出す。するとそこにいつもの胡散臭い顔が見える。

「こんにちは、暁美ほむらさん。私幻想郷の管理者、八雲紫と申しますわ」

「ご丁寧にも……幻想郷？それは何」

紫に銃を向けて言う。

「妖怪と人間がバランスを保ち暮らす、私達幻想の者達の最後の砦ですわ。そしてこの子達は私の幻想郷の住民」

「……ということは貴方は……妖怪」

「私だけではありませんわ。ここにいる水橋バルスイも、秦こころも、人ではございません。魔法少女とはまた違った力を駆使する強者ですわ」

いつもの胡散臭い笑みを浮かべて言う紫。うん、皮肉にしか聞こえないわ。まあ別いいけど。

「話は戻りますけど……巴ママは生きています」

「!!それはほんと!?!」

「あ、それはホント。多分【あつち】の私の家にいるわ」

「もう少しすればこちらの世界に世界を破壊しかねないエネルギーが襲いかかります。貴方はそれを知っていたんじゃないやなくて?」

「……私の魔法は時間逆行。それを望んだのは一番最初の時間軸よ。」

そう言って彼女は語り始める。

鹿目まどかとの出会い、魔法少女の事実、ワルプルギスの夜、そして今に至るまでの事全て。

「……そして今までの時間軸には貴方達の存在は無かった。だから怪しんだ。当然でしょ?」

「うん、まあ当然っちゃ当然ね。それで、何、私達に何をしろと?」

「手伝って欲しいの。ワルプルギスの討伐を。」

さて、どうしようか。もともとこっちに来たのはこいしを探すためだったんだからそ

れも大事じゃない、という気持ちを込めてゆかりへ視線を送る。

「…わかりましたわ、ワルプルギスはこの二人に手伝わせますわ。ただ、こちらからも条件がありますの」

「…何」

「私達がこちらへ来た目的は同じく幻想郷の住民【古明地こいし】を探し出すためですわ。見つけたら教えてほしいの」

「…わかったわ、交渉成立ね。」

勝手に交渉成立してんじゃねえよと突っ込みたいとこだがゆかりナイス。これでこいしが見つかりやすくなるかと良いけれど。

「…なにか近づいてきてる」

こころの声で気づいたがこれは魔女の結界では無いかと思う。ほむらと紫にコンタクトをとつても二人は察したようだ。すぐそこに結界を見つける。

「それじゃパルスィ、あとはよろしくー」

「あつ、ちよ逃げるなあつ!!……はあ……で、あの結界どうするの」

「もちろん、狩るわ。グリーンフィードはいらないのよね? 手伝って頂戴。水橋さん、秦さん」

そう言われたらやるしかないじゃないの、しかたないわねえ。

仕草は違えど二人共紙のようなものを手にする。

「「さあ、行くわよ」」

13話【私の日常、非日常】

どうも、寝坊したと言いつつも冷凍食品を駆使しつつちゃんと朝ごはんを作ってくれたパルスイに対してちよつと尊敬した秦こころだ。

今日もきょうとて学校に行くわけだが、この前のわるなるなんちゃらの決戦まであと少ししかないということ帰ってから聞かされて今の状況にやつと気づいてびっくりしている。と、どうかそんなに大変なことなら霊夢達幻想郷の者たちの力を合わせればすぐに終わりそうなのだが、そのところはどうかのだろう。

そんなことを考えてたら目の前のパルスイが急に止まった。教室についたのかと思えばパルスイの横を通り抜け、さいしんのつくえというものに座る。

そしていつものように特にない準備を終わらせてパルスイのもとへ行くと、そこには……えーと……ピンク髪……まど……なんちゃらと青髪の……さやえんどう？ いや違う……あ、そうださやかだ……さやかがいる。何時もの光景だ。そして他愛もない話をしてる彼女たちに私も混じり混じりちよつと話しながら時間を潰していく。これがいつもの日常。そして今日も一日過ぎてゆく。

帰り、今日は寄り道をする予定だ。何やらしよつぴんぐもーるといふ人里の出店を全てあわせたようなところに行くらしい。楽しくておすすめの店があるということでもワクワクしている。周りからはお面が見えないようになっていたのでわからないとは思
うけど。

笑えるのは笑えるんだ、でも強張ってしまつて逆に怖くなつてしまふ。どうしたものか。

おすすめの店についたとのことで、適当な席に座り、注文された「けえき」と「ぼにらふらつぺ」をいただく。このような甘いものが外にはあるのだな、和菓子しかあまり食べないものだからびつくりした。

あとからもうひとりくると言っていたので待つていると来たのは案の定「暁美ほむら」。彼女はパルスィの向かい、つまり私の隣に座ると何かを注文して話をし始めた。パルスィにはこつちに来てからの話を聞いたが「魔法少女が魔女になる」というフレーズしか覚えてないぞ、一体どういうことだ。そういえばそれ言われたときの記憶があまり無いような。あ、そういえばすぐ楽しくかつたな、久々に踊つた記憶がある。……と、話がずれたな。話は「ワルプルギスの夜」についての事だつた。ワルプルギスがどんな魔女なのか、今までの自分がやってきたこと、その結果など。その結果を聞いてわかつたことは、ワルプルギスが手強い相手であるということと、やつぱりほむらは人と接するのが苦手なんじゃないかということ。因みに後者を二人に行つたらグーで殴られた。たんこぶさすさす。痛い。そして私の意識は少しフェードアウトすることになる。

「……きて、起きて、こころ」

『ぬあつ……?』

ほむらはいなかった。おそらく話が収まったのだろう。因みに私はというと希望の面を叩き割られて太子をタコ殴りにして馬乗りになって天下統一する夢を見た。その話をパルスイにしたら「あ、はい、うん……」って帰ってきた。何がいけなかったのか。『結局どうなったのー?』

「家に帰ってから話すわ。」

そうか、長話か。寝ちやうかもしれない、枕の準備はしておかないと。

そう考えたらげんこつ食らった。何がいけなかったのか聞いてみれば最後のあたり声に出てたらしい。しまった。

こんな日常がいつまでも続けばいいのにと、柄になく考える。感情が顔に出せる日が近いのだろうか。そうだといいな。

そんなことを考えながら、私は今日も帰りを告げる。